マスターズを彩るレジェンドたち（18）

本誌の表紙は3月号となっているが、カレンダーの上では寒い2月。3日の節分の翌4日は立春だが、まだまだ三寒四温の寒冷期だ。新型コロナウイルスの新変異株であるオミクロン株の感染拡大は早く収まってほしい。1日も早くトラックとフィールドで、力いっぱい身体を動かせる日がくることを願って。今月もレジェンドの続編を。

写真／大江良一さん

大江良一さん（68歳・滋賀）「これからも頑張る」とやる気満々

マスターズ陸上の全日本選手権もコロナ禍で2020、21年と２年続きで開かれないままだ。2019年に群馬で開催された第40回記念国際大会を機に止まったままだが、その群馬大会で活躍した１人が大江良一さんだ。種目は短距離で、クラスはM65。

60ｍで８秒25（－2.2）、100ｍ12秒82（－0.1）とたった１人の12秒台、200ｍ27秒03（＋0.3）と見事に三冠を獲得した。まさに65歳での快挙である。2022年１月１日現在の各クラス日本記録樹立者のなかで、大江さんの名前があるのは200ｍだ。M60で25秒49、M65が26秒30。60歳代を謳歌している数字である。

近年、全国大会が開かれないなかにあって、大江さんが足を延ばしたのは、2020年９月20日に苅谷市であった、愛知マスターズ記録会。66歳になった大江さんは、M65・60ｍと100ｍは８秒14（－0.2）、13秒20（－1.2）で全国10傑中の２位。さらに、200ｍは27秒64と、ここもただ１人の27秒台で10傑中の１位だ。

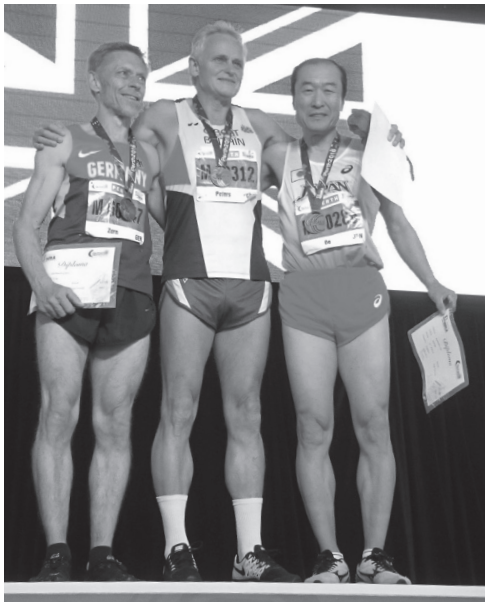
大江さんが陸上をやりはじめたのは50歳になってから。地域の運動会で走ってみたら、思っていた以上に走れ、意外な“自己能力”を発見した形に。「今まで走ったことがないのに」という大江さんはそこでマスターズ陸上への入会を決めた。

山口・下関市であった2007年の第28回国際・全日本マスターズ大会は、53歳だった。M50の100ｍで12秒29（＋1.1）で３位に食い込み、200ｍは26秒06（＋1.1）で６位だったが、２種目に入賞を果たした。この年は９月の近畿、10月の滋賀各マスターズ大会ともにM50・60ｍ、100ｍ、200ｍで１位を収めている。

100m、200mの二冠で9連覇

2009年に55歳となり、再び名古屋市で行われた全日本マスターズの第30回記念国際大会に出場。M55・60ｍは７秒54（＋1.9）で２位となったが、100ｍ12秒21（－0.8）、200ｍ25秒11（＋1.1）でトップを占め、二冠をゲットしたのだ。秋の第２回国際ゴールド

2016年世界選手権パース大会（オーストラリア）の4×100mRで4走を務めた大江さん（写真／左）。残り50mを切ってから1位をとらえ逆転優勝を飾った。



2016年世界選手権パース大会にて。M60・100ｍ12秒23（＋1.6）で２位となった大江さん（写真／右）。

マスターズ選手権（京都）ではM55・60mを含め、100m、200mの3種目を制勝した。

勢いに乗った大江さんは次年に東京であった第31回全日本マスターズ大会で、M55クラスの60m、100m、200mと全国一に。前年2位だった60mをも制したのだ。57歳になった2011年に和歌山であった第32回大会でもM55クラスの短距離の3種目で勝ち、連続三冠をやってのけ、その後2017年63歳まで100mと200mの二冠で9連覇を達成している。コーチなしの大江さんは、自身で考えた練習で、全国トップへ登り詰めたのだ。坂道を利用するなど地道な練習が実った結果だった。現在は、小学生の子どもたちの指導を熱心に行っている。

思い出は世界マスターズ大会への参加だ。2015年にフランスのリヨンで開催された第21回大会のM60・100m、200mに出て12秒32（－1.5）、25秒89（＋1.3）で4位と6位。

初参加の後、2016年のオーストラリア・パースでの第22回大会ではM60・100m12秒23（＋1.6）で2位に上がり、200m25秒31（＋2.3）とこちらも3位と上昇。仲間の4人で走った4×100mRでは優勝し、世界一に。「いやあ、楽しかったですね」と話す大江さんは、やる気満々で全国大会開催を待っている。

なお、大江さんは2021年11月16日に関西テレビの『よ～いドン！』という番組に登場し、マスターズ陸上についての談話もしている。

中村千枝子さん（80歳・神奈川）
43歳からマスターズの仲間入り

神奈川県海老名市に住む中村千枝子さんは、近年こそ活躍していないが、往年は記録集に名を残した。

マスターズ陸上を知ったのは、ある新聞がきっかけ。中村さんは2人のお子さんを持つ母親だったが、43歳のとき「体を動かしたい」思いから「そうだ、若い頃やっていた陸上を」と、早速入会した。自宅の近くに1周400mのトラックがあり、中学生らが練習している間に入り、若い頃を思い出しながら練習をはじめた。中村さんは旧姓・高橋。中学生の頃から短距離が得意で、当時行われていた全日本中学放送陸上（1955～73年）で中3のとき、100m13秒3で全国3位になっている。

高校は陸上が強かった愛知・名女学高（現・名女大高）へ進んだ。インターハイは高2の山口県下関大会と、翌年の東京大会に出て、80mHと4×100mRの1走で2年連続いずれも3位に食い込んだ。また、中村さんはインターハイで活躍した選手が出場する、高校東西対抗というイベントにも、80mHなどに出場した実績を持つ。

マスターズに入会し、ローカルの大会で足慣らしをした後、第8回の広島大会から全国の舞台に。ここからの活躍が目立ってくるが、当時の年齢は46歳。W45・100mに14秒15、200mが29秒23、走幅跳は4m47でいずれも1位。なおその頃80mH、三段跳は行われていなかった。

翌年の第9回秋田大会でのW45・200m28秒96、走幅跳4m41で連覇。この大会から三段跳が加わり、10m15とW35の記録を上回る10m台で優勝した。次の全日本マスターズ大会は“輝けマスターズ集う紀州路、世界から”のスローガンの下、和歌山で10周年記念大会として開かれた。

1989年、48歳になった中村さんはW45・200mに29秒38（＋0.6）、80mHが14秒97（＋0.4）で200mは3連勝し、80mHも1位。三段跳は10m35（＋1.5）を跳び大会新を出したものの、追い風参考で10m76（＋3.2）を跳んだ渡川孝子さん（46歳・徳島／2021年2月号参考）に敗れ、2位だった。

この年の中村さんは200m28秒44、80mH14秒97と2種目にW45クラスの日本記録をつくった。

4種目でニューレコード
女子最優秀選手賞獲得

圧巻だったのは、1991年に宮崎であった宮崎国際・第12回全日本マスターズ大会だ。前年の第11回山梨大会のW45・200m、80mHで14秒52の日本新、三段跳と3種目に優勝して、その勢いを宮崎大会へつなげた。このときの中村さんは52歳。W50クラスに上がっての200mは29秒14、80mHが14秒23と2種目に日本新、三段跳で10m04の世界新、日本新を更新。また走高跳は2位だったが1m30の日本新と、4種目で新しいレコードを次々にアナウンスさせ、女子最優秀選手に輝いた。

「全日本マスターズへの参加は7回目でした。勤めながらの練習で時間が足りず、そのうえ独学。コーチなしの練習でしたが、全国大会で初めて挑んだ走高跳まで日本新が出せてよかったです。第11回大会で女子優秀選手に選ばれ、今年は最優秀選手賞まで。一生忘れることのできない感動です」

2年後の1993（平成5）年には同じ宮崎で第10回世界ベテランズ（現・マスターズ）が開かれ、中村さんはW50・80mHに唯一の13秒台の13秒96で1位、300mHは53秒32で2位、走幅跳が4m23の3位、三段跳で9m78を跳び優勝と4種目に入賞した。このうち、80mHと300mHは日本新記録だった。

思い出深いのは1992年に14か国から1100人が参加したシンガポールでの第7回アジア大会。W50・80mH14秒9、走幅跳4m42、三段跳9m88と三冠を成し遂げ、表彰台に上がった大会だ。

長かったマスターズ陸上も順風満帆ではなかった。年齢が上がるにつれて、骨折で腕の骨にひびが入ったり、ケガに泣いた時期もあった。だが、体を休ませた後、元気になれば「また、頑張りたい」と話している。